

氷の張った湾に沿って、家々が弧をなして並んでいる。雪をかぶった山脈が、村を抱くように湾の両端まで伸びていた。

ノアのスノーモービルは、くねくねと曲がった道を村を目指して突っ走った。ヘッドライトはつけていない。つける必要がないからだ。ここ北極圏では、夏の終わりまで本当の夜はない。空は真珠のようにぼんやりとかがやき、それが地上の雪と氷に反射して明るいのだ。

スキは耳をすました。

スノーモービルのエンジンの向こうに、静けさが広がっている。

ここには、パトカーや救急車のサイレンはないのだ。トラックの走る地ひびきも、どなりあう声もない。大きな、静まりかえった北極のたそがれがあるばかりだった。

ただ、この寒さは格がちがう。凍った指のように服の中にまでしのびこんでくる。スキは、一刻も早くジェイクの家に着くよう願わずにはいられなかった。

ところが、村が近くなると、ノアはスノーモービルの方向を変えた。集落に入らずにどンドン村を離れていく。

スノーモービルは、何もない雪原を何もないところへ向かってひたすら走り続ける。

ノアにしがみついたスキが、いつたどこに行くんだろうと不安になりかけたころ、こぼほどの小さな丘のうしろに、ポツンと平屋の家と納屋が見えた。

やつと着いたとき、体は骨の髄まで冷え切っていた。ノアがスノーモービルを納屋に入れるあいだ、スキは突っ立ったままガタガタふるえていた。

犬の鳴き声にぎやかに聞こえて

